

令和2年度評価委員会の結果（令和元年度終了課題に対する事後評価）

<評価委員一覧>

氏名	現職等
後藤 晋	東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林教育研究センター 准教授
滝田 早苗	埼玉県山林種苗協同組合 理事長
原口 雅人	埼玉県中央部森林組合 森林管理アドバイザー

※所属は、令和2年10月現在のものです。（敬称略）

<評価結果>

研究課題名	ニホンジカ捕獲効率向上のための技術開発	
研究担当	森林環境担当	
研究期間	平成27～令和元年度	
研究概要	<p>(1) ニホンジカ季節移動ルート・範囲の解明</p> <p>10頭のニホンジカに首輪を装着して7頭については数カ月～1年以上の継続したデータを得、移動実態を追跡、把握した。6頭の行動圏は鳥獣保護区を中心として一時的に隣接する鳥獣保護区外を利用していた。250日以上追跡できた4頭の行動圏の面積は11.2～12.4km²となっており、特に鳥獣保護区内では他個体との重複が大きくなっていた。残る1頭は、冬季中における行動圏の中心が鳥獣保護区内にあったが、春に鳥獣保護区外へと移動したところ有害鳥獣捕獲された。7頭はいずれも比較的若いメスジカであったことから定着性が高く、季節的に長期かつ長距離の移動をすることが少なかったものと考えられる。短期的な移動について、基本的に夜間は採草地や耕作放棄地などの地域、日中はその周辺の森林などに滞在している傾向が認められた。27日間親子を同時に追跡したところ、子供の行動圏は親の行動圏内にあり、一時的に親が単独行動している間の子供は比較的狭い範囲にとどまっていた。</p> <p>(2) 簡易な捕獲技術の開発</p> <p>農林業関係者などの狩猟者以外の者にも設置や維持管理が可能な簡易な捕獲方法として、スリット式ワンウェイゲートを開発した。ホームセンター等で取り扱っている資材で制作することが可能で、製作費も安価である。弾性素材を使用しているため、作動時にシカへのショックが少なく、複数捕獲も可能である。既存の防護柵を一部補強などすることで、囲いワナとして活用することも可能である。入口幅を60cm程度に狭め、奥行きを長く</p>	

	<p>することで、上から押し下げ脱出されるリスクを相当程度抑えられた。この方法は網の隙間を通過させる構造のため、枝角を持つオスジカを捕獲することはできない。柵内部に開閉可能な区画を設定することで、柵内に入ったシカを効率的に捕獲できるようにした。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：c
		活用見込み：a
	総合評価	B

研究課題名	森林の循環利用を促進する埼玉型コンテナ苗木生産技術の確立	
研究担当	育種・森林資源担当	
研究期間	平成 27～令和元年度	
研究概要	<p>(1) 立地条件の異なる 5 造林地において全苗組標準法で生産されたコンテナ苗の植栽を実施した結果、立地条件にかかわらず高い活着率（約 90%）を示した。</p> <p>植栽 1 成長期経過後の樹高成長量は総じて小さかったものの、2 成長期経過後以降は 1 成長期経過後の成長量の 4 倍以上に成長し、立地条件によって成長量に差が認められた。礫の多い土壌条件では樹高成長量が小さかった。</p> <p>(2) 育苗期間内での間引きを予定して、3 本立ちするような種子数を播くことにより発芽時点での欠損ポット数を減らすことが可能になり、移植の手間を省略することができた。</p> <p>2 年生母樹から採取した挿し穂を 5・10cm に調整し、発根促進処理を施した後、肥料を混合した培土を充填した容器へ挿し付け育苗した結果、生存率は 80%を挿し穂の長さは 10cm 程度が有効であることが分かった。</p> <p>(3) コンテナ苗使用により労力の少ない一畝植えが可能であることが明らかになった。一方、一畝植えが可能だったのは土壌が柔らかく、礫の少ない場所に限られた。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：b
		活用見込み：a
	総合評価	A